

2022年7月24日（日）メッセージアウトライン「一粒の麦」ヨハネ12：20～26

聖書箇所：ヨハネの福音書12：20～26

タイトル：「一粒の麦」

テーマ：イエス様は過越しの祭りのためにエルサレムに上られた。イエス様の地上生涯で最後の過越しの祭りとなる。

イエス様はこの後、ご自分の身に起こることを「一粒の麦」にたとえて語られた。この譬えは、イエス様がこれから通られる十字架と復活が全人類にとってどういう意味があるかを教えてくださっている。これによって、イエス様を信じる者として最も大切なことを知ることとなる。

今日の箇所からイエス様にとっての一粒の麦の意味と、イエス様を信じる私たちにとっての一粒の麦の意味を考えてみよう。

初めに：

植物の種を蒔いて、何かを育てたことのある方なら、どなたも経験したことがおありだろう。たとえば、ゴーヤの種を蒔いてみる。

いつの間にか芽が出てゴーヤの苗は大きくなり、そしてたくさんの実をならせる。その頃、ゴーヤの苗をひっくりかえしても、元の種は姿も形もない。新しいゴーヤが芽ばえて大きく成長するためにその種のすべてを捧げてしまった、すなわちいのちを捧げたのだ。

一粒の麦が死ぬということはそういうこと。麦が新しい芽を出すために蒔かれた麦粒はすべてを捧げてどこに種があったかわからなくなる。でも、ゴーヤも麦も一粒の種のいのちをもらって成長し、豊かな実をならせていくのだ。

1. 一粒の麦となられたイエス様のこと（一粒の麦として蒔かれる＝死ぬべきタイミング）

①過越しの祭りの前に

イエス様は死んだラザロを生き返らせて、神の力をお示しになった。さらに異邦人がイエス様にお会いしたいと訪れたことは、全ての人々のためにイエス様が十字架にかかるその時、すなわち一粒の麦として死ぬべきタイミングが来たことを示している。

2. 「一粒の麦が死ぬ＝豊かな実を結ぶとは？」

*「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし死ぬなら豊かな実を結びます。」（24節）

一粒の麦としてイエス様が死んで、そのいのちをいただいて、豊かな実を結ぶ者とされたクリスチャンの幸い。

3. 一粒の麦と私たちとの関係

「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至ります。」 (25節)

- ①イエス様は「一粒の麦」となって十字架の上で私たちの罪の身代わりとなって死なれた。しかし、本当に死ななければならなかったのは罪人である私たち。イエス様の十字架の死と復活は、神に対する背きの罪の故に絶たれていた神と私たちの霊的な関係の回復。それが新しいいのち。このいのちがなければ実を結べない。
- ②では私たちが一粒の麦になるとはどういうことでしょうか？

*死ぬこと

自分のいのちを愛する者とこの世で自分のいのちを憎む者

「憎む」という表現は「選ばない」という意味をユダヤの表現では持っている。

出エジプト記20：5b～6節「わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、私の命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」憎む＝「主なる神を選びとらない者」という意味で使われている。

*古い自己中心の自分を十字架につけて古い私が死んで、イエス様の新しいいのち（蘇えられたいのち）に生きることは、私の願う人生ではなく、主が私たちに願っておられる人生に身を置くことこそ、豊かな実を結ぶ人生。

- ③「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、私に仕える者もいることとなります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」(26節)

4. 結論

一粒の麦として、ご自分のいのちをお与えくださったイエス様。このお方のいのちをいただいて豊かな実を結ばせていただける私たち。私たちの罪のゆえに絶たれていた神との霊的な関係が回復されたいのちを、私たちはどのように生きたら良いだろうか。

この世にあって主のために捧げていく人生を歩ませていただくなら、絶えず、古い私を十字架につけて、イエス様にいただきたいのちを歩む道を選びとらなければならない。この世にあっては厳しい道、狭い道かも知れないが、イエス様に結び合わされた新しいいのち、豊かな実を結ぶことのできるいのちを体験できる祝福の道でもある。

教会はイエス・キリストにある新しいいのちをいただいた人々の共同体。イエス様に仕える者は、神の国の市民とされた者。イエス様から神の民としての生き方を学ぶ。この世の決まりと神の国のきまりは異なる。神の国のきまりは聖書のみ言葉から、しっかりと教えていただくのだ。神の国のきまりの中に自分の身を置いてお従いしていくと、キリストのいのちが豊かに注がれて豊かな実を結ぶことができる。

新しいいのちをいただいた者は、古い自分を日々十字架につけて、一粒の麦としての新しいいのちを主のみこころに従って捧げ尽くしていくよう召されているのだ。